

# 線と形

三岸節子は、1999(平成11)年94歳で亡くなるまで毎日毎日制作を続けました。屋内でも屋外でも目の前の対象を黙々と画帳に取り込んでいきました。花にしろ、静物にしろ、風景であっても自分なりのものにして表現しようとする彼女の強い意識がありました。節子の線や面、そして形に対する想いを節子自身の言葉とともに作品で紹介してまいります。

## デッサン

デッサンは絵画にとって米の飯のようなものといえましょう。常にデッサンをしていないと栄養失調におちいつてしまいかがちです。

デッサンは形をとらえる運動であり、実体を掴む訓練であり、油彩の色面と色面の接線にもデッサン力の脆弱さはいちじるしく露呈してまいります。(略)一本の線でも強靭な、切っても切れない線を描けるまでになりたいものです。(「デッサンについて」『花より花らしく』求龍堂、1977年、P27より)



スケッチする三岸節子 スペインにて 1980年代後半



《とうもろこしと魚》1963年 ©MIGISHI

## 線と面へのおもい

アトリエの隅にいつも埃を浴びて転がっている壺、皿、籠、花瓶に挿してある枯れた花々、果物、柿、林檎、葡萄、そしていくばくかの布きれ。

毎日わたくしはこれを描きます。

克明な写実、時には堅い鉛筆で、また時にはペンのデッサン。形の追求。ヴォリュームの把握。立体への執心。造型への探求。(略)壺も皿も籠の中の果実も、みんなことごとく形やヴォリュームや色彩となって消化され、口中にし腹中に呑み下して、一つの面も、一つの線も、自由自在、自家薬籠中のものにしなくては駄目なのです。(「静物画家の独白」前掲書、P14~15より)

## 花と壺

新しい壺に夢中になって惚れこんでも、すっかり呑み込んで、肉体の中に消化しきらなくては、絵画の中に生命をもって現出してはこないのです。

つまり一個の壺も、一個の皿も、この時一個の壺でも一個の皿でもなく、独立した物質ではなくて、もはや人間の要素を還元されて、画面という構成分子に溶けこんでいるのです。線であり面でありヴォリュームである処の分子になりおおせているのです。壺も皿も果実も造型要素の構成分子以外の何物でもないです。その芯に作家の肉体をとおした柔軟な筋金の入ったところの。

埃を浴びて転がっていた分子の、面も形もヴォリュームも自由自在な作家の息吹がかかつて命を得たのでした。(「静物画家の独白」前掲書、P15~16より)

縦の面と横の面と、円いもの、そしてリズム、運動、対象を把握して自在に構成してゆく過程はわたくしを捉えて離さないのです。そして訓練が経験を生み充実してゆく。画面追求への執拗さと共に、人間の成熟さへ達せられてゆくのです。絵画が従で人間が主か、絵画が主で人間が従なのか、そのいずれでもあるのでしょうか。(「静物画家の独白」前掲書、P18~19より)

近代絵画は思考する絵画です。忠実に対象を再現する絵画ではなくて画家の思考を経て人間の個性表現に重点があるのですから、被写体の領域はあくまで造型要素、画面構成の分子であるにすぎません。一個の壺、一個の果実でも自己を表現し宇宙の真実に迫るところの役割を果す一分子なのです。

しかし一本の線を引くにも、一点の面を決定するにも、この実在の裏づけなくしては真実を捉えることができません。常に画家の思考と実在の対象とが厳しい闘いを、技術を通していどんでいるのです。(「静物画家の独白」前掲書、P17~18より)

わたくしは毎日、花やら壺やら果実を描く。身辺に転がってるものはなんでも描く。花を描くにあらず、果実を描くにあらず、壺を描くのでもない。線があり、面があり、色彩があればそれでよいのである。造型的要素になればそれでいいのである。花も壺も果実も作品の象徴にすぎぬ。

アトリエにはうづ高く未完の作品が積み重ねられてゐる。このいまだ出来上らない過程の作品が、苦悶の集積が、うめきを発してゐるようにもみえる。幾年も幾年もまだ足りぬまだ苦しみが足りぬ、まだ神の宿り給はぬ未熟さにきずだらけになってうめいてゐる。

わたくしはそのくるしんでゐるその過程が一番自身にとつて尊いと思つてゐる。たえずもかいてゐる。より真なるもの、より美なるものに向つてたえず苦しんでゐる。それでいいのだと思つてゐる。自己内面の活動が止ることなく、常に感動し発見し探索してみればそれでいいのだと思つてゐる。

花がダリヤの花に描けなくても、蜜柑が蜜柑らしく描けなくても、赤い花が黄色にならうが、まるい壺が三角にならうが、白を黒といひくるめようが、どうでもいいことである。

花にたくして壺にたくして、わたくしの魂が神に近づけば、永遠なる真理に近づけば、そして生きて天国に入ることが出来れば完璧である。(「花・壺」「黄色い手帖」求龍堂、1983年、P75より)



《細い運河》1974年 ©MIGISHI



《作品 II》1988年 ©MIGISHI